

北アイルランドにおける詩人たちのアイデンティティ 1950年代から1970年代前半を中心に

文学研究科・英語英米文学専攻
准教授 西谷 茉莉子

キーワード： 北アイルランド、詩、紛争、アイデンティティ、ジョン・モンタギュー

【研究概要】

1921年に北アイルランド自治政府が発足し、アイルランド島北部の6州は、残り26州（後のアイルランド共和国）とは異なる道を歩み始めました。以後、住民の帰属意識はイギリス・アイルランドの間で二分化され、現在に至っても北アイルランド住民のアイデンティティは一枚岩とは言えません。ただ、近年では「北アイルランド人」を自認する住民も一定数います。この比較的新しい「北アイルランド人」としてのアイデンティティは、いつ頃、そしてどのように確立されていったのでしょうか。本研究は、こうした問いを出発点とし、北アイルランドにゆかりのある詩人たちが、自身のアイデンティティをいかに模索したか明らかにすることを目的としています。なかでも詩人ジョン・モンタギュー（1929-2016）に焦点を当て、彼が創作活動を本格化させた1950年代から、紛争が激化していった1970年代前半にかけての作品を中心に検証を行います。

北アイルランドの歴史(1921年~1972年)

1921年 北アイルランド自治政府発足。

⇒カトリック系住民は、投票権、住宅、雇用などの差別に苦しむ。

1939-45年 第二次世界大戦時、イギリスに協力。

⇒連合国アメリカから25万の兵士が駐屯。大戦中、中立政策をとったアイルランド自由国と対照を成す。

1960年後半、差別撤廃への関心が強まり、非暴力抗議運動が行われる。自治政府が厳しい弾圧によってこれに応じたため、暴動に発展。

1968年 北アイルランド紛争の始まり。

1972年 非武装のデモ行進に参加していた一般市民に、英国軍のパラシュート部隊が発砲し、13人の犠牲者を出す。（血の日曜日事件）

本研究で扱う

北アイルランド詩に関連する出来事

1958年 ジョン・モンタギュー、第一詩集出版。

1962年 詩人のフィリップ・ボブズバウムがクィーンズ大学に教員として赴任。「ザ・グループ」を結成し、定期的に詩のセッションを行った。シェイマス・ヒーニー、シェイマス・ディーン、マイケル・ロングリー、ジェームズ・シモンズなどの詩人、批評家たちが参加。

⇒「アルスター・ルネサンス」

1970年 モンタギュー、ジョン・ヒューイットとともに北アイルランドでリーディングツアー。

1972年 モンタギュー詩集『荒蕪地』出版。
1975年 ヒーニー詩集『北』出版。

【期待される効果・応用分野】

ブレグジットにより、北アイルランドがイギリスに残留した意義がこれまで以上に問い直されている今、北アイルランドのアイデンティティが文学作品においてどのように描かれてきたかを探ることは、北アイルランドのみならず、イギリスおよびアイルランドにおける現在進行中の事象をより深く理解する手がかりとなります。

【アピールポイント】

紛争が激化していくなかで、若い世代の詩人たちが脚光を浴び、「アルスター・ルネサンス」と呼ばれる動きが起きました。本研究では、こうした詩人たちの活躍の陰に隠れがちな前世代の功績にも光を当て、再評価を試みます。

【関連情報】

論文：(1) 西谷茉莉子「ジョン・モンタギューとアイルランド語をめぐる一The Rough Fieldを中心に」『コルヌコピア』31・32合併号、2023年、41-61頁。

(2) Nishitani, Mariko. "John Montague's Apprenticeship and the Legacy of Yeats." *Irish Literature in the British Context and Beyond: New Perspectives from Kyoto*, edited by Hiroko Ikeda and Kazuo Yokouchi, Peter Lang, 2020, pp. 157-177.

リサーチマップURL：<https://researchmap.jp/mnishitani>

A) 近代ドイツ語圏の多様性と統一性に関する文学史・文化史・思想史

B) 当事者批評の構築

文学研究科・英語英米文学専攻
准教授 横道 誠

キーワード： A) ドイツ語圏、文献学、精神史
B) 精神医学、文芸批評、当事者活動

【研究概要】

A)民俗学、観相学、一元論、南洋研究、前衛詩研究など近代ドイツ語圏のさまざまな文化的・思想的トピックを一定のパースペクティヴから立体的に捉える。

B)精神科医の世界観を反映した病跡学とは逆に、患者（当事者）の世界観を反映した当事者研究の可能性を探究し、学問的・創作的方法として確立する。

【期待される効果・応用分野】

A)、B)ともに人文系諸分野の枠組みはもちろん、文理の枠組みすら超えた学際的なインパクトを獲得できると考えている。

【アピールポイント】

業績多数

【関連情報】

「横道誠の研究室」内「研究業績」URL

<https://sites.google.com/site/mktyokomichi/forschen>

中国、オランダ、日本 — 東西花鳥画の比較研究

文学研究科・英語英米文学専攻
教授 吉田 朱美

キーワード： 百鳥図、瑞鳥、メルヒオール・ドンデクーテル(Melchior d'Hondecoeter)

【研究概要】

花鳥画の大家であった故・上村淳之氏は、「西洋では、人と花鳥とは別世界のもの」であるから花鳥画というジャンルは西洋において成立しなかった、という発言をされている（『長楽未央』2014年秋号 二頁）。「花鳥と対等な視点で、人の思いを鳥に語らせ花に託して描ける」のは「東洋の考え方」であり、西洋においては生態画・博物画になってしまうという（同上）。上村氏や伊藤若冲同様、多くの鳥を飼い、「鳥のラファエロ」との異名をとったオランダの画家メルヒオール・ドンデクーテル(Melchior d'Hondecoeter, 1636年～1695年)はどうだろうか。彼の描く鶏や孔雀には若冲や長沢蘆雪等、江戸期の日本の画家の作品におけるそれらの鳥と類似した姿勢・構図が見られ興味深い。ドンデクーテルも思いを鳥に託して描いたのではなかろうか。これら東西の画家が比較研究されることはこれまでなかったようであるが、若冲や蘆雪が中国の絵画を研究・学習していたのと同様、ドンデクーテルにもまた中国の事物に触れる機会があったということがこのような類似をもたらしている可能性はないだろうか。明朝期の中国で多く描かれた「百鳥図」に類似した種々の鳥を揃えた風景画を、ドンデクーテルに影響を与えた先輩画家ルーラント・サーフェリー(Roelant Jakobsz Savery)が多数残しているのも注目に値する。

【期待される効果・応用分野】

国際京都学の推進に寄与することが期待される。

【アピールポイント】

従来あまりなされてこなかった比較研究である。

【関連情報】

リサーチマップ <https://researchmap.jp/akemiyo>